

日本経済新聞 「死海」消える？ 止まらぬ水位低下、海水注入も



2013年5月26日 0:00 [会員限定記事]

死海消滅に警鐘を鳴らすレンスキー博士。右上の建造物は 1994 年まで船着き場として利用していた

中東の塩湖「死海」は日本でもテレビの旅番組や旅行雑誌などでしばしば紹介される有名観光地だ。死海の塩や泥を使った美容関連商品は日本でも愛好者が多い。しかし水位は年々低下している。周辺の人口増や工場建設で取水量が増えた一方、気候変動による少雨が続くことが要因だ。このままでは湖が消滅しかねないと、

周辺の観光業者は不安を募らせている。

不安募らせる観光業者

死海の湖岸は、結晶化した塩が砂利や岩にへばりつき、雪が降ったように真っ白な光景が続く。周囲を切り立ったがけに囲まれ、近隣は旧約聖書にまつわる史跡も多い。

欧米やロシアなどから多くの観光客が訪れ、周辺はホテルや美容関連施設が軒を連ねる。新たな施設も増えている。イスラエルなどで多くのホテルを運営するファッタル・ホテル・グループも新ホテル「ヘロZZ」をイスラエル側の湖岸で9月に開業する。

死海は水位低下で2つに分かれた



投資額は 2000 万ドル（約 20 億円）で、年間 4 万人の集客を見込む。総支配人のラニ・シトリットさん（50）は死海のプライベートビーチまで歩いて 1 分もかからない立地の良さをアピールし「アジアからも多くの観光客を呼び込みたい」と期待を示す。

ただ、この立地条件がいつまでも保障されるわけではない。死海が年々縮小しているためだ。水位は毎年 1～1.5 メートルのペースで低下。1980 年代に建設されたホテルの中には、完成当時は水辺に面していたのに、現在は 2～3 キロも離れ、宿泊客をバスでビーチまで送迎する施設もある。

水位低下の影響とみられる地盤沈下も起きている。シトリットさんは将来、こうした事態に自らのホテルが直面することを警戒。「個々のホテルでは対処できない。政府は早急に水位低下に対応してほしい」と語る。

周辺国、対立超えた連携カギ

イスラエル地質調査局の調査では、死海の水位は過去 20 年間で 25 メートル以上低下した。もともと一つの湖だったが、90 年代後半に中央部が干上がり、南北 2 つに分かれた。

同局のナダブ・レンスキー博士（43）は水位低下の要因を「ヨルダン川の水量低下と肥料原料会社の取水の影響が大きい」と指摘する。周辺国の人口増加による生活用水の需要増のほか、気候変動を背景にした上流域の降水量減少が水量低下につながっているという。

死海の水にはミネラル分が多く含まれており、主に肥料用のカリウムを採取する企業が湖岸に工場を建設し、取水量を増やしたことが水位低下に拍車をかけた。レンスキー博士は「このまま何も手を打たなければ今後 200 年程度で死海は消滅する」と警鐘を鳴らす。

イスラエルやヨルダンなど周辺国は紅海の海水をパイプラインで死海に注入する案も検討しているが「生態系に与える影響を精査しきれない」（レンスキー博士）として実現していない。死海に面する各国・地域は対立し、戦火を交えた歴史があるが、水位低下は一国では対応できない。いかに緊密な連携を構築できるかが事態打開のカギになりそうだ。

（イスラエル・ネベヅハール近郊で、押野真也）